

びぶりおてか



同志社大学図書館報 №16. 1974. 10. 1

読書のすすめ

大 学 長
松 山 義 則

わたくしたちは子供のときから数えきれないほどの書物を読みつけてきました。読書によって獲得した多様な情報は、ひとりひとりの独自の世界を形成し、個性の成長に役立ちました。感動をもって読みとおした、生涯わすれがたい印象ぶかい本もあります。また、無意識に機械的に読みとった情報も身につけています。

少年時代に読んだ「ロビン・フッドのゆかいな冒険」はわたくしにとって忘れられない本の一つです。土や石の城壁でかこまれ、はね橋のある城郭になった、12世紀、英国の都市で、欲張りの金持や、権力に安住する王や貴族、僧侶を痛快なまでにやっつけるロビン。緑の頭巾に緑の服、矢つつを背に剛弓をはって、シャーウッドの森を縦横無尽にかけめぐり、王有林の鹿をおって走るロビン・フッドの姿は少年の心をおどらせるものでした。色づりのパイルのかいた挿絵も忘れられず、最近、小学五、六年生用と書いた児童書になっている翻訳を手に入れて、読み出しはじめました。

人間は文字記号を駆使して、独特の思想、象徴の世界を形成します。これに対して動物は、外界や対象を知覚、認識することから、欲望解消のためにただちに行動にうったえます。この動物の生存様式にくらべて、人間は感情や意志のなまなましいはたらきさえも、文字記号を用いて客観的に体系化し、行動にはやる以前に思考による思想の回路をもってしています。「考えながら歩く」ことのできる人間の長は、欲情を文字に託すことによってより高次な人間のあり方を行使できるのではないのでしょうか。読書によってわれわれは世界を一層拡大し自己をきざきあげたいと思います。

新図書館に思うこと

文学部文化学科 71年度生

福田 美恵子

たしか71年の学費値上げ問題の時期だったと思うが、いわばそれとの交換条件のような形で、長く学生たちの希望していた図書館建設が決定し、昨年末、やっと完成してから、そろそろ一年をむかえようとしている。

私たちが利用していた旧図書館は、有隣館二階の一部と、啓明館の二階というせまきで、いずれも床はきしみ、暗く冷暖房施設などももちろんない。又、多くの蔵書は私たちの目に触れることもなく、これがマンモス大学の図書館かと思われるおそまつぶりであった。

だから待望の新図書館の完成は嬉しかったし、全くすてきだと心から思ったものだ。現代感覚の建築だが、やはり伝統のレンガ造りで、キャンパスにもピッタリ溶けこんでいる。参考図書室と開架閲覧室が広く設けられたことにより、私たちが手に取ることのできる書物が多くなったのはなによりと言える。又、読書室もあり、私たちの勉学の場、交流の場が大いに増したと思う。色調も落ちついている。机・椅子・窓等々いずれも充分考えられている。まだまだいくらかも挙げられるだろう。

しかし、しかし又不満もある。ロッカールームが意外に狭く時々「満員お断り」に出くわす。それに第一、入口で学生証提示というのはなんとかならないものだろうか。学生でなくても、勉学したい人に広く解放されたそんな図書館があっても良いと思う。それから、新しく出版された書物がまだまだ少ないということ。最近のような書物の高騰は、ますます図書館の利用度を増さずにおかない。それなりに館側でより多くの書物を購入してもらいたい。

最近（試験期間中ばかりでなく）図書館利用者が多くなったと思う。よりよい勉学状況の下でこそ学問の花も開くのだと思う。それにつけても、我校程のマンモス大学に新図書館程度のものではなくてはならないし、当然もっと早い時期に、学生の要求を入れて建設されるべきだったと、大学側の勉学施設一般に対する態度を考えさせられずにはいなかったのだが。

図書館から

今回は、利用者からみた図書館の感想を書いていただきました。

新図書館の運営も軌道に乗って、あと2カ月で満1年を迎えます。昨年12月の開館以後、利用していただく方が非常に多く喜んでおります。

まだまだ利用する立場からは、不十分な面もあるのではないかと思います。（例えば試験期になるとロッカーが不足する等）

図書館では、ひとつひとつ、提起される問題点について、可能なかぎり、使用していただく皆様の方で、解決する努力をいたしたいと考えております。図書館はこうあって欲しいと感じられる、現実的な、具体的な問題について、お気づきの時は、ぜひ電話で、カウンターで、投書でも図書館へお伝え下さい。

貴重な図書・雑誌・資料を預かる図書館と主に個人として、それを利用される皆様方とでは、時には、残念ながら禁帯出図書等のように貸出しをして欲しいが、貸出しを受けられないというような、相反することがあります。

図書館では、その相反する点を、可能なかぎり縮める努力をして行きたいと考えております。

より皆様が利用しやすい、親しみやすい図書館とするため、ぜひ皆様のご協力をお願い申し上げます。

また、7頁後半に掲載いたしております、新図書館の新しい機能である、AV室を中心とした視聴覚関係室の運用について、現在AV委員会を館内に組織し、利用者の皆様にどのように開放して行くかを検討しております。

今年度中には、開室の準備、あるいは、収集資料の整備が完了したものから皆様の利用に供せるようにいたしたいと考えています。

(図書館庶務課)

哲学に関する二次文献について

今回は哲学関係の二次文献を紹介します。

*哲学、といいましても非常に広範囲に及ぶものですが、今回は、いわゆる哲学、倫理学、日本思想など一般的に哲学といわれるものを収録しました。哲学を学ぶ場合の手引としての文献案内や書誌等の二次文献を、なるべく新しく本館所蔵のものに限って紹介します。しかし哲学関係の総合的な書誌は、日本にはほとんどない状態ですので、色々な分野から、できる限り広く包括的なものを選び、様々な角度から紹介するように努めました。

なお、すべての分野における文献探索の基本資料として、文献目録の文献目録ともいえるべきものがあります。すなわち、『本邦書誌ノ書誌』（天野敬太郎編 間宮商店 昭9 ㊦016.01; A）、『日本の参考図書』改訂版（同編集委員会編 日本図書館協会 昭44 ㊦028; N2-1a(1)）、同補遺版（昭47 1964. 9—1970. 12）などです。また雑誌の記事に関しては、『雑誌記事索引』人文・社会編（国立国会図書館編 月刊 ㊦P027; Z）があります。

〔1〕 哲学全般に関するもの

1. 哲学研究入門 上・下巻

古在由重他編 東大出版会 昭33 2冊 (㊦102; K11)

西欧哲学について古代から現代までの概要を述べ、各項末に詳しく文献が紹介されている。下巻の巻末に索引表あり。

2. 哲学研究案内

山崎正一、田島節夫編 有斐閣 昭39 240P. (㊦101; Y-2)

現代の哲学と諸科学との関係について幅広く述べ、各項毎に詳しく参考文献が紹介されている。

3. 教養文献解説 上巻

河合栄次郎、木村健康編 社会思想研究会出版部 昭24 (㊦016; K 4(1))

本書の大部分は哲学関係の書物の解説で、思想、哲学、哲学史等に分けて紹介されている。

4. 哲学の名著

久野収編 毎日新聞社 昭39 352P. (㊦028. 1; K)

古代・中世・近代・現代の西欧哲学思潮を史的に展望し、主要哲学者の著書の概要を紹介してある。巻末に哲学用語の解説と人名索引あり。

5. 立体哲学

渡辺義雄編 朝日出版社 昭48 567P. (㊦101; W)

一種の便覧とも言うべきもので哲学者の紹介、著作解説などがある。巻末には年表、用語解説、さらには基本的参考文献、邦訳文献のリスト、詳細な索引がついている。

6. 講座現代の哲学 1～6巻

山崎正一他編 有斐閣 昭33～40 6冊 (㊦108; K 2)

各巻はテーマ別に構成されている。各巻末には詳細な文献解説があり、参考文献も多数紹介されている。

7. 現代哲学選書 1～15巻

学文社 昭45～ 15冊 (㊦108; G) (現在, 1～4, 6, 12巻のみ所蔵。他は近刊)

各巻の巻末に詳細な参考文献が収録されている。

8. The Encyclopedia of Philosophy

Paul Edwards, editor in chief. Macmillan Co. & The Free Press; Collier-Macmillan. 1967 8冊
文字通りの哲学の百科事典で、著名な哲学者については極めて詳しく解説されており、参考文献も多数紹介されている。

9. 哲学事典

平凡社 昭46 1697P. (㊦103.3; T-1a)

現在、日本で最も完備された哲学事典。各項目毎に参考文献が紹介されている。

10. 岩波講座哲学 総索引

岩波書店 昭44 80P. (㊦108; I 2(Y))

岩波講座哲学全18巻の事項、人名、書名、地名等を含む総索引である。

11. 人物文献索引 人文編

国立国会図書館参考書誌部編 昭42 388P. (㊦028.28; K2(1))

昭和20年から39年までのわが国の刊行物のうち、主として人文科学の分野に業績を持つ日本人、欧米人に関する伝記の記事、論文を検索できるもので、哲学者も多く含まれている。

〔2〕 各主題別に関するもの

12. 文科系文献目録 XVI 倫理学編
日本学術会議第1部編 昭39 250P. (㊦028; N-2(㊦))
昭和20年より38年までの間にわが国で刊行あるいは発表された倫理学関係の研究文献が収録されている。巻末に掲載雑誌名一覧と執筆者の索引あり。
13. 新倫理学事典
金子武蔵編 弘文堂 昭45 488P. (㊦150.3; S)
大項目主義の事典で、各項毎に参考文献が紹介されている。
14. 文学・哲学・史学文献目録 IX 西洋古典学編
日本学術会議第1部編 昭35 189P. (㊦028; N(9))
明治初年より昭和32年までの間にわが国で刊行された西洋古典に関する研究文献が収録されている。哲学部門(P.7~P.65)は項目別に分けて収録されている。
15. 宗教哲学名著解説
守屋貫教編 三笠書店 昭15 323P. (㊦016.201; M)
西欧の宗教哲学の名著の解題書で、巻末に文献目録がある。
16. 文学・哲学・史学文献目録 IV 宗教関係学術編
学術会議第1部編 昭30 151P. (㊦028; N(4))
昭和20年から29年までにわが国で発表された宗教関係の文献が収録されており、宗教哲学(P.92~P.101)の項がある。
17. 日本における中世哲学関係文献目録
稲垣良典編 南山大学 昭32 25, 24P. (㊦016.18; I)
昭和32年までにわが国で発表された中世哲学及び新スコラ学関係の著作、翻訳、論文などが紹介されている。
18. 実存主義文献
＜松浪信三郎、飯島宗享編 『実存主義辞典』 東京堂 昭39 P.227~P.256＞(㊦114.5; J)
内容は、概説書及び解説書、個々の思想家関係に分けられていて、邦訳文献を中心に紹介されている。
19. ニーチェ文献
古澤伝三郎編 <『ニーチェ全集』別巻 理想社 昭38> 68P. (㊦134.922; N(S))
個人書誌の代表的な例として掲げた。日本においては最も整ったものの一つであろう。西洋の部と日本の部に分かれており、それぞれ著作と研究書などの別に文献が紹介されている。
20. 西洋思想史参考文献
＜松浪信三郎編 『西洋思想史辞典』 東京堂出版 昭48 P.323~P.336＞(㊦130; S7)

西洋哲学、思想における古典的作品で、入手しやすい邦訳文献が収録されている。

21. 世界思想教養辞典 日本・東洋編
中村元、山田統編 東京堂出版 昭40 519P. (㊦103.3; S(1))
各項毎に参考文献が紹介されており、巻末に人名、書名、事項の索引あり。同じく『西洋編』もある。
22. 文学・哲学・史学文献目録 X 中国哲学・思想編
日本学術会議第1部編 昭35 293P. (㊦028; N(10))
昭和20年より34年までの間に日本人によって発表された中国哲学及びこれに関連する問題についての研究文献が収録されている。巻末に掲載雑誌名一覧と執筆者の索引あり。
23. 日本人物文献目録
法政大学文学部史学研究室編 平凡社 昭49 1199P. (㊦028.281; N)
明治初年から昭和41年までに刊行された図書、逐次刊行物の記事で、日本人の伝記に関する文献が収録されている。日本の哲学者、思想家について調べるには有効であろう。
24. 日本の思想 1~20巻
筑摩書房 昭43~47 20冊 (㊦121; N4)
各巻の巻末に参考文献が収録されている。

〔3〕 雑誌に関するもの

25. 『哲学研究』総目次
京都哲学会編 創文社 昭42 (㊦P100.1; T2-3)
第1巻から第43巻第6号(通巻1~500)までの総目次である。執筆者別索引あり。
26. 『理想』総目次
理想社 (㊦P100.1; R)
創刊号より現在に至るまでの総目次である。1号から403号までの執筆者別索引がある。
27. 『思想』総目次
岩波書店 (㊦P051; S9)
創刊号より現在に至るまでの総目次である。1号から500号までの執筆者別索引がある。

なお哲学関係の雑誌には以上の他、『哲学雑誌』(哲学会 ㊦P100.1; T)、『哲学年報』(九州大学文学部 ㊦P100.1; T4)、『倫理学年報』(日本倫理学会 ㊦150.1; R2)などがあります。雑誌においては、特集号などの場合、研究展望や文献の紹介などが掲載されることがよくあります。

以上色々紹介しましたが、哲学の入門書、概論などの巻末にはたいい基本的な文献が掲げられていて参考になると思います。また個人全集などの巻末にも、その人に関する参考文献や、その全集の総目次などが収録されている場合があります。

同志社大学図書館の歴史（その8）

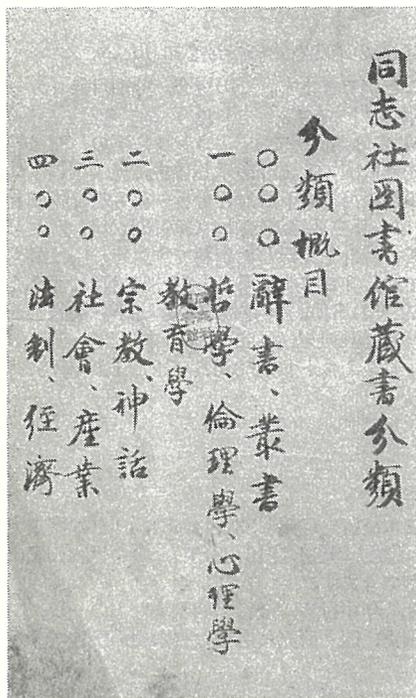
1920年代前半の同志社図書館

1920（大正9）年4月、同志社大学は1918（大正7）年に新しく公布された「大学令」による「大学」として新発足し、同年5月10日には「大学」の重要な要素の一つであり、学園をあげて待望久しかった同志社図書館の新館（現在：啓明館）が竣工、その開館式が盛大に挙行された。

当時は丁度、第1次世界大戦後の物価高騰のため同志社の経営は財政的には困難な時期ではあったが、新制度の「大学」の発足もあって、大学（新旧）の学生数は1,000名を突破し、学園全体の学生生徒総数も年ごとに増加して1923（大正12）年には遂に4,598名に達した。これは図書館第1期工事（現在：啓明館書庫部分）の完成した1915（大正4）年の約1,500名から見れば約3倍の急増であるが、このような盛況と関係者の努力と校友および一般篤志家の後援によって、発足当初の「大学」の研究・教育体制は困難を乗り越えて着々として整備されていったのである。

蔵書冊数の増加についても、1923（大正12）年遂に50,000冊を突破さらに別に研究室蔵書10,224冊を加えるに至った。これらのうちの約3分の1は寄贈図書であり、多い年は半数以上がこれであった。

しかし、創立以来永い間、同志社図書館は学園全体の総合図書館として運営されてきて、図書費の多くは図書館に配分され、蔵書の管理も原則として図書館が当ることとなっていたが、学園の規模の拡大と組織の整備、さらに図書館施設の不備から漸次、各部各学校別予算、分散管理に移行したと考えられる。そして、新制度の「大学」発足によって制度的にも研究室図書が図書館の蔵書とは別に分散管理されることとなった。これは大学各学部の充実という、当時の至上命令から、また規模の拡大と活用の便宜から考えれば当然のこととも考えられるが大学全体の有機的関連や各学部における図書管理についての配慮が欠けていたこと、および、その後の組織の変更や蔵書の増大などのために全学の蔵書の把握が困難となって、結果的には有効な図書の活用が不可能となり、その改善が大きな課題となった。



「同志社図書館蔵書分類」の第1ページ

浅吉郎（ペンネーム：半月）の指導のもとに編纂された「同志社図書館蔵書分類」（写真参照）によって分類していた。この分類法はメルヴィル・デュイが1876年に発表した図書分類法として画期的なものとして評価され、その後全世界に広まって、現在でも主流をなす「十進分類法」を範としたもので展開性も助記性もない不十分なものではあるがデュイの十進分類法の日本への移入の初期のものの一つといえることができる。

これよりさき、1918（大正6）年、はじめて「同志社図書館規則」が制定されて館長制がとられ、翌1919（大正7）年には「同志社職制」が制定され、同志社の職制が整備されて図書館の職制もこのなかに規定され、館長と司書とを置くことが定められた。その後、さらに改正されて館長・司書に加えて書記をも置くことが定められたのであるが、その初代館長には滝本誠一政治経済部教授が1917（大正6）年9月から1919（大正8）年1月まで在任し、そのあとをうけて同年3月からは荒木良造予科教授が館長事務取扱いとして就任し、のち館長となって昭和初期まで在職した。そのほかの図書館職員については大正期中頃までは3～5名であったが末期には漸増して6～8名となった。

この時期の図書館の利用状況は新館完成の前後によって大きく変化していて、1914（大正4）年度の閲覧者数4,003人、同冊数7,210冊が1921（大正10）年度のそれは19,246人21,026冊と急増し、大正末期の平均は年間閲覧者約20,000人、貸出冊数約25,000冊、1日約60人、70冊であった。これは現在の状態とは比較にはならないが、この利用面で注目しなければならないことは同志社に於いては早くから図書の貸出が実施されていたことである。

当時の図書整理、特に分類については1912（大正2）年以來、同志社神学校の初期の卒業生で神学者、牧師、詩人として多方面に活躍し、シカゴ大学図書館学校へも留学して京都府立図書館長であった湯

実例を中心とした

資料のさがしかた — 6 —

今回は、日頃カウンターに数多く寄せられている質問の中から*物価問題、に関する質問例をピックアップして、資料のさがしかたを紹介しします。ほかの主題あるいは分野に関する図書資料をさがすときも参考にしてください。

なお、文中で紹介している資料は何れも新目録図書で図書館に所蔵している一例にしすぎません。

〔質問例 1〕

「物価指数」の意味、定義をたしかめたい。

回答 用語、言葉に関することからについては、まず辞書（例：「広辞苑」請求記号 813.1;K）が適しています。しかし、この場合特定分野の専門用語でありますので、専門事典（例：「経済学事典」330.3;K5、「統計学辞典」350.3;T）が有用です。またどの分野の用語かわからないときは、辞書とともに百科事典（例：「世界大百科事典」031;S）、用語事典（例：「朝日現代用語事典」031;A2、「現代用語の基礎知識」など）が役に立ちます。さらに詳しく知りたいときは、説明するまでもなくその分野の参考書を利用することです。

〔質問例 2〕

最近の物価動向と物価政策について書かれた図書はありませんか。

回答 理論を含めて、まず考えられる分類個所は、337.8（物価）です。そのほか観点は異なりますが、333（経済政策）、332（経済事情）、365.5（生活問題）などでも取り扱われていますので、分類目録（カード）で所蔵を調べて下さい。総合年鑑（例：「朝日年鑑」059.1;A）、雑誌新聞も同時に利用して下さい。

◇単行書のほかに、政府の年報、白書類には「国民生活白書」（365.5;K）、「日本経済の現況」（332.81;N）「経済白書」（332.81;K2）、「諸外国の賃金・物価・労使関係」（366.02;S）などがあります。

〔質問例 3〕

昭和12（1937）年頃からの灯油小売価格の推移および昭25（1950）年以降の消費者物価指数を知りたい。

回答 統計的なことから（数値）ですので、統計書、各種年鑑で知ることができます。この場合、分類目録（カード）の359.33、359.337の個所を見て下さい。経済関係の各種統計書が見出せます。

※分類番号359は、各種の統計（理論を除いた特定主題の統計書）の分類個所です。コマ以下の、33は経済全般の統計を示し、337は物価の分類個所が337.8ですので物価に関する統計を示します。

◇質問のような商品の指数、価格の推移を調べる資料として①「長期経済統計—統計と分析—第8巻 物価」（359.33;C）②「日本経済統計集」（359.33;N5）③「明治以降本邦主要経済統計」（359.33;N4）があります。これらは明治以降から比較的最近までの物価全般についての統計を集録した資料です。特に①は最も詳細です。また、より早い最近の統計的データを知る資料としては、「日本統計月報」（P351;N2）、「小売物価統計調査年報」（359.337;K）、「消費者物価指数年報」（359.337;S2）、特定地域の諸統計を集録した「京都市統計書」（351.62;K）、あらゆる分野の基礎的な統計資料を集録した包括的な「日本統計年鑑」（351;N3）、「世界統計年鑑」（350.9;S）などがあります。「エコノミスト」（P330.1;E2）「東洋経済月報」（P359.33;T）、総合年鑑などにも逐次掲載されています。

統計資料の利用については、号をあらためて詳しく紹介する予定です。

〔質問例 4〕

中世の紙の価格を知りたい。

回答 歴史的なことから、事実を知りたいときは、専門事典（例：「日本経済史辞典」332.1;N5）、「日本歴史大事典」210.03;N3）、などのほかに、次の歴史便覧が役に立ちます。「読史総覧」（210.03;T）の中世物価表の項を見ますと、紙、炭、茶、酒、米、金、銀などについて知ることができます。

◇「読史総覧」「読史備要」（210.03;T2-1a）ともに年表、歴朝、年中行事、金銀米銭相場などの一覧、皇室、神道、仏教、武術などの系譜、その他が掲載されており、国史、国文研究に必要な日本史の便覧です。

〔質問例 5〕

物価問題を特集した雑誌新聞記事のさがしかたについて……

回答 数多く出されている雑誌、新聞の中から目的の記事、論文をさがし出すことは容易なことではありません。そのようなとき雑誌記事索引、総目次類を使うと早くさがせます。

◇雑誌——「雑誌記事索引—人文・社会編—」（P027;Z）の経済—日本の項を見ますと、各記事、論文の執筆者名、論文名、収載雑誌名、巻号などがわかります。昭和31年に創刊され、経済学を中心に社会科学分野の和欧の雑誌および和書を対象とした索引である「経済学文献季報」（P028;K）も有用です。また、適し

て記事をさがしたいときは、社会科学分野の雑誌の創刊号から昭和2年までの記事を対象とした「法政・経済・社会論文総覧」(016.3;K)があります。主な雑誌の記事索引、総目次は、雑誌・参考図書室の書誌コーナーに備えています。例えば「経済セミナー」(P330.1;K14)の総目次を見ますと*特集=物価問題入門、が昭和45年10月号に掲載されていることがわかります。

また、「週刊東洋経済」臨時増刊の「物価総覧」「経済統計年鑑」等の特別号は「雑誌・新聞目録」(カード)にも各号の内容を記載しています。「経済統計年鑑」昭和49年版の主な内容は、*物価特集、のほかに*景気観測に役立つ主要データ、*経済の回顧と展望、*一般統計、などです。

◇新聞——各新聞縮刷版の各月号巻頭に総目次、索引があります。

〔質問例 6〕

物価、消費者問題に関する参考文献リスト(文献目録)のようなものはありますか。

回答 〔質問例2・3〕で紹介しましたように、資料をさがす場合はまず分類目録(カード)で該当の分類個所や、記事索引、総目次にあたることです。しかし、雑誌論文を含めた特定主題の文献を紹介したリスト(文献目録)があれば、図書館に所蔵していない図書資料も含まれていますのでさらに便利です。分類目録(カード)の028の個所を見れば、各主題の文献目録の有無がつかめます。主な文献目録は書誌コーナーにあります。当館には、質問のような主題に限定した文献目録そのものは所蔵しておりませんが、その分野の単行書、事典類の巻末、項末などに紹介されている場合がありますので参考にして下さい。

◇ある文献をさがす場合や、あることがらを調べる場合など、どのような参考図書、書誌(目録、索引)を使えばよいか、その種類、内容、使い方を説明したガイドブックともいえるべき「日本の参考図書」(028;N2-1a)があります。

単行書、事典類に収録されている参考文献リストの例を次に紹介します。

物価に関するもの

1. 物価・インフレーション文献解題 <日本経済事典 中山伊知郎等編 講談社 昭48 P.811-814 (332.1;N7) >
①物価・インフレーションの理論②日本と世界の物価の特色③物価安定の対策に関するものを収録。
2. 戦後日本の物価問題 鈴木多加史著 東洋経済新報社 昭45 P.191-196 (337.821;S2)
3. 現代経済 第5巻 物価(川口弘編) 筑摩書房 昭45 参考文献:P.275~278 (330.8;G3)

消費者問題に関するもの

1. 消費者福祉 今井光映等著 ミネルヴァ書房 昭46 参考文献:P.325-337(整理中)
2. 消費者年鑑 '71 日本消費者協会 昭46 参考文献:P.450-461 (673.2;S28)
①消費者問題の専門家の推奨する文献②日本消費者協会資料室の書棚から③'71消費者の文献を収録。この年鑑の内容は、消費者運動史、消費生活と公害、統計と解説、法規、団体および個人名簿などです。
3. 産業と消費者保護—消費者保護大事典—通産省企業局消費経済課監修 通産資料調査会 昭46 (673.2;S23)

参考文献は収録していないが、消費者行政の理念、その歴史と関連する法律、省令などの解説、資料等行政面から詳細に記述編集されている。

なお、本誌各号の*文献探索;二次文献の利用、および*実例を中心とした資料のさがしかた、にはシリーズで種々の主題、ケースを紹介しています。カード目録のつかいかた、閲覧の方法など、「利用案内 1974」にも詳しく説明していますが、わからないことは遠慮なく係員にたずねて下さい。

図書館視聴覚室の開室予定について

図書館の2階にAV室を中心とした視聴覚関係の部屋が6室あります。利用者の皆さんの中には、これらの部屋について御存知でない人も多いと思いますので、ここで簡単に紹介してみます。

これまでの図書館における資料収集の中心はいうまでもなく印刷された資料、すなわち図書でしたが、最近ではマイクロフィルム、レコード、テープ、スライド、ビデオカセットなどの非印刷資料による情報が著しく増えてきています。同志社大学図書館においても視聴覚資料の収集と充実を考えています。視聴覚資料の利用は設備や機材の整備のこともあり、いろいろの視聴覚資料をすべて収集することは出来ませんので、当初はマイクロフィルム、レコード、テープなどが収集の対象になります。これらの資料を利用するための部屋が視聴覚室と呼ばれるAV室、マイクロリーダー室、オーディオ室です。

現在では整備の点もあり、AV室だけを開室しています。AV室では月曜日から金曜日までの毎日午後1時から3時まで、FM放送の音楽番組を中心にすでに収集したレコードによるコンサートなどを行っています。読書の合間など寛ぎたい時に利用して下さい。その他、図書館の主催する講演会や図書館の資料の利用方法の説明会なども随時この場所で行われます。

収集された資料が整理され次第聴取したい資料を借り出して利用できるオーディオ室も順次開室してゆく予定です。図書館を中広く利用して下さい。

植木文庫の写本二冊について

「分権論」 「日英条約論」

土佐の有名な自由民権論者であった植木枝盛の旧蔵書が彼の死後明治26年4月同志社図書館に寄贈、植木文庫（『びぶりをてか』2号参照）として保管され閲覧に供されている。

近い将来植木文庫の冊子目録を作成することになり、今回現物と図書カードとの照合を行った。たまたま植木文庫が設置された明治26年6月に作成された植木文庫の図書台帳がみつかりそこに記入されている図書と現在の図書との照合も行うことができた。明治26年の図書台帳がみつかったことは植木枝盛の研究にとって誠に幸いなことで文庫設置当時の図書及び現在所在不明の図書も判明した。

植木文庫は当時397タイトル811冊で構成され、その内9冊は植木枝盛自身の著作であるという理由（筆者の推定）で、以前図書館に寄贈された小室・沢辺文庫から移入されている。

今回紹介するものは植木文庫の内から彼の手になる写本2冊である。



「分権論」

分権論は福沢諭吉が明治9年11月半ばから12月半ばまで1カ月かけて書かれたもので内容は地方分権問題を取りあげている。当時の出版条例にふれることを心配して原稿のまま持っていたが写本で知人の閲覧に進呈したことが最近板垣退助等の書翰で判明した。（岩波書店版福沢諭吉全集別巻245頁）一般に出版物として販売されたのは明治10年11月である。

植木枝盛は東京在京中にこれを知って林有造（？）から借用し明治10年1月28日、29日に写本した。さらに2月に入って5日下村盛俊（？）より分権論を借用して5日6日と2日間夜1時まで写本を行った。大きさは24センチ68丁表紙は褐色である。（植木枝盛日記63頁64頁）

「日英条約論」

植木枝盛と同じく自由民権論者の一人で立志社の社員でもあった高知生れの馬場辰猪（1850～1888）が英国ロンドンに留学中出版した英文日英条約論を植木に送本し植木がこれは「我邦人ニ益スル所ナキニ非ズ」として早くから意識していた。後にこの訳文を民間雑誌73号（明治10年6月3日）74号88号89号91号92号93号に掲載し明治11年12月8日午後9時より写筆し翌9日午後1時に写筆をおえたものである。大きさは22センチ41丁表紙は紺色である。なお本文1頁の外に角形の植木枝盛の印鑑が捺印されているのも珍らしい。

（注）本文の民間雑誌は明治7年2月慶応義塾より刊行された「民間雑誌」とは異なり同志は明治8年8月第12編をもって終刊となった。明治10年4月28日慶応義塾系の人々が刊行していた「家庭叢誌」が「民間雑誌」と改題（67号より）された。この方2回目の民間雑誌が本文にいう所の民間雑誌であって、この雑誌は後程日刊新聞に変化していったが現在その現物は何処の図書館にも所蔵なく現物を見ることは不可能である。

あとがき

『びぶりをてか』16号をお届けします。

- 表紙カットは、あらためて、住谷総長にお願いいたしました。ありがとうございました。
- 年2回発行している本誌を10月1日・4月1日発行に、今回より改めました。ご了承下さい。
- 5月に、第6代同志社社長 故 下村孝太郎先生のご愛蔵書籍資料のご寄贈を、先生ご令息、下村孝次氏より受けました。ここに厚くお礼申し上げます。
- 本誌をご一読いただき、何かとご批判ご叱声いただきますようお願い申し上げます。

“びぶりをてか” 同志社大学図書館報 №16 1974年10月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 211-2311

編集責任者 楠見 愼 伸（図書館庶務課長）